2018

友引町内会通信

Vol.216

2

凍鶴（いてづる）の　一歩を賭けて　立ちつくす　　山口青邨

鶴は首を翼の中に突っ込んで眠り、雪の中では片足で立っています。静けさの中で高貴な感じがします。しかし、もし足が折れたら、雪の中に倒れて立ち上がれず、凍死するかも知れません。生きるとは、一歩に賭けているようなものです。凍てつくような日々であっても、心に支えをもって、すっくと立っていたい。

普段着のわたしたち

おでんが好きです。おでんは熱々でなければなりません。

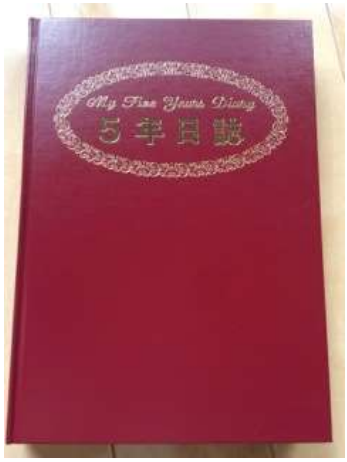
おでん用というわけではありませんが、IHの卓上ヒーターを買いました。

イオンで約５千円ほどです。火力は思いの外あります。おでん以外にも使えます。便利！！

征阿

またやってしまいました。阪急電車で発車間際のかけ込み乗車をしたら「女性専用車両」でした。終日それが存在することを忘れていました。今回は防寒で顔が写真の通りでしたので、そのまま女性のふりをして次の駅までドア近くで立って潜んでいることにしました。キリストさまにお祈りするポーズで胸を隠していれば大丈夫です。神が護ってくださいます。最近人から「変」だと言われることが多くなりました。

俊徳丸



この年頭から書き始めました。日記は過去に何度も挫折していますが、これならイケるんじゃない？と、自分に淡い期待を抱きつつ。

５年後、愚息も 10 歳に。その成長記も兼ねて。

それでもダメだったらママ失格です

訶梨帝母

「モネの池」へ出掛けました。（拙寺から車で約 35 分）もしこの季節に大阪・京都或いは関東から友人が来て「行きたい！」と言われた時にそなえて下見しておこうと。

やはり見頃は睡蓮の花が咲く５月下旬から７月。「あじさい街道」も一緒にとなると６月下旬です。頭にハートや V 字の模様をのせた錦鯉は現在疎開中。

お土産には綺麗なパッケージの焼き菓子があります。板取で唯一のケーキ喫茶「niwa」もお薦め。小さなお店です。お見逃し無く。

迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

この冬は寒い。ぼちぼち更年期に差し掛かる身に堪えます。という事で心身ともに温まるお酒の話。

「電気ブラン」なるお酒をご存知でしょうか。東京は浅草、雷門至近にある創業百二十年「神谷バー」で供されるお酒。ブランデー、ジン、ワイン、薬草等を秘伝の技で調合し、度数は30度。ものすごくパンチの効いた養命酒とでも申しましょうか。現在一杯２７０円。

「神谷バー」、「電気ブラン」は文学の世界にも数々登場します。

太宰治は『人間失格』の中で、

「酔いの早く発するのは、電気ブランの右に出るものはないと保証し…」とし、

萩原朔太郎は、

『一人にて酒を飲み居れる憐れなるとなりの男に何を思ふらん（神谷バァにて）』と歌っています。

こもりうた㊲

私も東下りのついでに何度か立ち寄りました。真っ昼間から営業していてバーというよりは大衆食堂。創業明治十三年という老舗のロマンを感じさせる洒落た雰囲気は全くありません。入口の券売機で食券を買い、蛍光灯に照らされる明るい店内で自ら空席を探し、喧騒の中、電気ブランを引っ掛けるという風情。リタイヤして時間に余裕のありそうな高年者、割烹着を着たままちょっと休憩という感じの近所のおばさん。地元の喫茶店にありがちな客層。下町で長年続く気負いのない酒場とはかくあるべきか。

或る時、五十年間神谷バーに通っている翁と相席になりました。コムズカシイ本を片手に昼間っから電気ブラン。某新聞社を定年まで勤め、退職後は毎日来ているのだとか。矍鑠（かくしゃく）としたその様子に「やはり電気ブランは養命酒だ」と思い至った次第。話も面白く、ご自分の追加ついでに一杯ご馳走してくださいました。一期一会。袖すり合うも他生の縁。

コーヒーより安い電気ブラン。ちょいと立ち寄り一杯。こんな店が近所にあればと羨ましく思うのですが、問題はその度数。太宰の仰せの通り、酔うのです。さらに、店内には「電気ブランのチェイサーは生ビール！」という恐ろしい宣伝文句があちこち貼られています。その翁の「試してごらん。悪くないよ。」という言葉が呪文のように聞こえ、いざ。

当然ですが、薄まらない。30度の電気ブランに生ビール。何を根拠に誰がこんな事を！（ビール会社ですよねぇ。）

その後、新幹線に乗り、帰巣本能にて帰宅。ほぼ記憶はなく、手足に数カ所の赤タン青タン擦り傷。転んだか、電柱にぶつかったか。温まるどころか背筋がゾクッとした顛末。

お持ち帰り用もあります。（上記写真）

訶梨帝母

年暮る

毎年 12 月になると東山魁夷の画集を開きます。その中の「年暮る」(1968 年)という作品が好きだからです。たぶん、定宿にしていたホテルの窓から見た雪景色の京都の街の画です。その画集に添えてある魁夷の文書がまた素敵過ぎます。

『年を送り、年を迎えるこの時に、多くの人の胸に浮かぶであろう、あの気持ち。去り行く年に対しての心残りと、来る年に対してのささやかな期待。年々を重ねていく凋落の想いと、いま、巡り来る新しい年にこもる回生の希い。「行き交う年もまた旅人」の感慨を、京の旅の上で私はしみじみ感じた。こうして、私の京の旅は終わった。…』(『東山魁夷画文集　美の訪れ』より)

この画集に出会ってから毎年暮れもおしつまると無性に京都盆地の少しだけ重い冬の風が恋しく街を歩きたくなります。平野を吹き抜ける岐阜の「伊吹おろし」に比べて湿気を含んでいるように思います。今年も、本当は仕事をしておかないと、かなりせっぱ詰まった状態になることはわかりつつ、つい出かけてしまいます。阪急電車の四条河原町駅を下車、階段を登り地上に出ると、私の期待を裏切らない風が心地よく迎えてくれます。裏寺通りを北へ。この辺りは妻が生まれ育ったお寺があった場所。6歳のころ大原へ移転したそう。妻は幼少をここでどんな年の瀬を過ごしたのか想像しながらそのまま北へ。矢田寺さんを通り過ぎると、岐阜人の私を信長公が迎えてくれる本能寺。と言っても、明智光秀に討たれた時の本能寺は現在と違う場所だそうです。このお寺、現在は商店街とビルに囲まれた都会のお寺で観光的要素は少ないので観光客はほとんどいません。境内に入ると、近代的な宝物館と木造の本堂があります。その相反する建物の間をうまく取り持っているように楠の大木があります。楠のおかげで都会の中にあって清閑さは保たれています。不思議な魅力のお寺だと思います。大木の下にはさりげなくベンチが置かれています。「ここでのんびり日向ぼっこをするといいよ。」と教えてくれたのは親しい人です。更に境内の 7 軒の塔頭寺院を通り過ぎると不思議な路地が現れます。身を任せ吸い込まれて行くと出た先は人が多く歩く河原町通りです。「静」から「動」へ、この「いきなりさ」を味わえるのも魅力です。

賑やかな通りに排出された私は、その近くの古いビアホールにて「牡蛎フライ定食」で遅い昼食をとることになります。隣のテーブルには頬に年輪を刻まれたご夫婦が黒ビールを楽しそうに飲んでいます。とてもお洒落なお二人です。私は窓際に座り、お二人と通りを行きかう人をぼんやり眺め幸せを感じています。こうして、私の「空想」の京の旅が終わりました。

俊徳丸

能『隅田川』

『隅田川』は、人買いにかどわかされた子供を探し求めて、京の都からはるばる東（あずま）の国にたどり着いた女性が、子供は結局その地で死んでいたことを聞かされるという、中世の悲しい話です。作者は、世阿弥の長男元雅です。

近世までの日本においては子が親の前からいなくなることはそう珍しいことではありませんでした。『隅田川』のように、その子が不遇のうちに死んでいったということも、よくある話だったかもしれません。元雅は、あえて、この「よくある話」を取り上げました。能では珍しく、親子の再会がかなわない結末になっています。

母親は、隅田川を渡るとき、渡し守の船頭が「一年前、子供が人買いに連れてこられたが、身体は弱っており、その場に捨て置かれて死んだ。死に際に、母のことを恋しがり、念佛を四五遍唱えて事切れた」と語るのを聞きます。

母親は、もしやとの思いから、もういちど船頭に子供の話を求め、やはり死んだのは我が子にちがいないことを知ります。母親が、土地のものたちに混じって、この子の塚の前で供養の念佛を唱えているとき、中から子供が唱える念佛の声が聞こえてきます。子供は姿を見せますが、抱こうとすると消えていなくなり、残るのは草の生いしげる塚のみ、母親は悲嘆の底に沈む、というところでこの能は終わります。なんだか救いようのない話のように思われるかもしれません。そうでしょうか。

母親のこのやり場のない悲しみは、小さな子をなくした親が等しく味わう共通の心といってよいでしょう。この能の大きな特徴は、その悲しみを、私たちその経験がないものもふくめて、観る者すべてに、同じレベルで感じさせてくれるところにあります。観客は、一人で死んでいった子供を憐れに思い、母親と一緒に涙を流すことによって、強い感情移入を経験します。観客はただその場に放っておかれるのではなく、静かに舞台を去って行く母親の心をたどりながら、舞台から解放されるのではないでしょうか。

能の終わり近く、「南無阿弥陀佛」の連称が、観る人の魂に訴えかけるかのように、力強く繰り返されます。「この子が極楽で阿弥陀佛に護られますように」との思いを込めた大念佛です。法然や親鸞、一遍が、阿弥陀佛による心の救済を粘り強く説いた鎌倉時代以後、近世に至るまで、佛による救済の観念は人々の心に深く染みこんでいたにちがいない、と私は考えています。中世の日本に生きた作者元雅は、登場人物すべてに念佛を唱えさせることによって、母親の心に寄り添ったのではないでしょうか。

（散歩道）

「人生には楽しみが必要である」
パスカル

「ご趣味はなんですか？」と聞かれると、いつも答えに窮していました。「仕事です」と言えば、格好いいかも知れませんが、人生の楽しみ方を知らない朴念仁（ぼくねんじん）みたいでしょう。

そんな私を哀れんだのか、昨年２人の方が声を掛けてくださいました。

２月に、檀家さんのお一人から室内楽のコンサートを教えていただきました。時々クラシックのコンサートには出掛けていましたが、ホールが遠いのと、チケットが高いのが難点です。

ところが、申し込んで抽選に当たると、無料で招待してくださる会社があるのです。それも世界で活躍する一流の演奏家の室内楽に。最初は「嘘でしょ」と思い、次には「なんと太っ腹！」と。しかも、その会社は拙寺の梵鐘を鋳造してくださった会社の子会社です。

生演奏の素晴らしさは、その臨場感の中に身を置いた人にしか判りません。

お寺の本堂はお経の声がよく響くように造られています。ですからコンサートホールとしても最適なのです。いつか拙寺でもやりたいですなぁ、「戒名のない音楽会」。

お盆過ぎにお誘いいただいたのは陶芸同好会です。美濃焼の本場多治見から先生を招いて本格的に学ぼうというもの。

頂いた「会の目的」には、人生を楽しむことを最大の目的とし、食事・掃除等も皆で分担し、以下のことを心掛けるものとします。一期一会の精神で、集う・習う・語る・学ぶ・礼儀、とあります。

一期一会は心得ていますが、私の「礼儀」は貴乃花親方並みかも知れません。

美濃焼の志野、黄瀬戸、とりわけ織部の造形の奔放さと、吸い込まれるような緑色。今までは美術館で鑑賞するものと思っていたのです。それが自分で作れるとは！

最初に作るものはカミさんにプレゼントすると決めていました。大きめのぐい飲みは大阪の関東炊き屋（おでん屋）「たこ梅」にヒントを得たもの。「酒！」と注文すると、７勺ぐらい入りそうな錫の器に、やはり錫のたんぽで燗を付けた「黒松白鹿」を注いでくれます。

手びねりで作った丸い器は完全にビギナーズラックです。最初は自分用の飯茶碗を作るつもりだったのが、手に取った粘土が大きすぎて丼鉢になりそうだったのです。そこでお惣菜を盛るのによさそうな器へ変更。

緑の釉薬をかける時も、先生が少し席を外された間に自分で勝手にかけてみたのです。

お正月過ぎに窯が開かれ、初めて自分が作った焼き物を見て「わぉ、本当かなぁ！」。

１年に２つも楽しみを教えていただいて、これからは「ご趣味は？」と聞いて欲しい。

迷走坊

『私説法然伝』（３７）

王家と平家の時代②

先月号では保元元年の後白河天皇の新政の開始と信西入道について書きました。今月はその同時代の動きについて書きます。

【保元の乱において、後白河天皇が勝利者となれたのも信西入道の力によるところは大きい。後白河天皇の乳母は信西入道の二番目の妻である。鳥羽法皇崩御の後はその葬儀を取り仕切り、保元の乱に至る藤原頼長卿らが荘園から兵を集めることを禁止した後白河天皇の綸旨（天皇の命により発行される命令書）等の一連の措置を取り仕切ったのも信西入道と言われている。保元の乱により反対派を一掃することに成功した後白河天皇・信西入道であるが、後の天台座主であり関白藤原忠通卿の息子である慈円は『愚管抄』において「日本国ノ乱逆トハ云ウコトハ起リテ後、武者ノ世ニナリニケルナリ」と書き記したように、この保元の乱を契機として武者、つまり軍事力によって政治的な決着をつける時代へと転換した。そしてこれが後の信西入道の命運を決めることに繋がる。

信西入道は藤原頼長卿と同じく、実権を握ると政治的改革を始めた。先に記した保元元年令を打ち出し、次々と改革の政策を実行していく。具体的には荘園の整理である。記録荘園券契所を新たに設置し、強権的に各地の荘園の整理が行われた。それにより荘園の支配体系が天皇＝王家を頂点とした統治下にあるものとされた。荘園の整理と並んで各寺社の統制もなされた。神人と呼ばれる神社に属する神事や社務の補助・雑務に当たった人々はこの時代では、神社の権威を背景に様々な利権を獲得しており、警護なども担った事から武装もしており、一大勢力となっていた。寺院においては悪僧・僧兵の勢力が神人と同じく拡大しており、強訴を繰り返し、金融活動を繰り広げていた。寺社仏閣勢力の統制はかつて絶大な権勢を誇った白河法皇ですらなし得なかったことである。「天下三不如意」と呼ばれる①鴨川の水②双六の賽③山法師だけは白河法皇の権勢を持ってしても何ともならなかったのであった。鴨川の水とは氾濫を繰り返していた鴨川の流れ、双六の賽とはサイコロの目のことであり、これらは自然現象や運の事である。山法師とは寺社佛閣の勢力のことである。後白河天皇と信西入道は保元元年の新政によって寺社佛閣の勢力の統制に乗り出したのである。下賀茂神社・上賀茂神社など八社の神人の定員を定め名簿の提出を義務化した。そして比叡山延暦寺や園城寺の悪僧等の活動を抑制した。これにより天皇の名において寺社佛閣の勢力は統制され神佛に準ずる存在と位置づけられた。さらに後白河・信西政権は翌年に三十五ヵ条の新制で官人・職能集団のあり方を定め、検非違使庁の再編と治安対策の強化を行った。そして内裏の再建を行った。天皇＝王家を頂点とした国家の再編と新たな構築を行ったのである。一見するとこれらの改革は順調のように思えたが、全てが後白河・信西の思い通にはならなかった。】

以下次号に続く（征阿）

観経物語（１１４）

正宗分（しょうじゅうぶん）その68

散善（さんぜん）中品上生その２

《本文その二》

行者は見巳わりて、心大いに歓喜す。自ら己れの身を見るに、蓮華の台に坐せり。長跪合掌し、佛の為に礼を作すに、未だ頭を挙げざる頃、即ち極楽世界に往生するを得んに蓮華は尋いて開く。華敷くの時に当たりて、衆くの音声の、四諦を讃嘆するを聞く。時に応じて即ち阿羅漢の道を得、三名六通ありて、解脱を具う。是れを中品上生の者となづく。

《意味・訳文》

（修）行者はこの様子を見終わって、その心は大きな歓喜に満たされる。（そして）ふと、我が身をふりかえって見ると、いつしか蓮華の台座の上に座っているのであった。長跪＝座してから尻を踵から上げ腰を伸ばしひれ伏した姿勢で掌を合わし、合掌して佛に向かって礼拝すると、まだ、その下げた頭をあげないうちに、ただちに極楽浄土に往生することができる。まもなく蓮華の花も開く。その蓮華が開いたとき、多くの声が、苦（この世界は苦しみに満ちているという不変の実相＝苦諦）、集（苦が起こる原因である煩悩＝集諦）、滅（苦と集を止滅させた悟りの境地＝滅諦）、道（悟りの境地に達するための修行＝道諦）の四諦という四つの真理を讃美するのが聞こえてくる。（その声を聞いた）行者は、たちまちのうちに、阿羅漢という尊敬され供養するに値する聖者としての悟りを得て、（そして）過去・未来・現在の三世を明らかに見通す力（＝宿命明・天眼明・漏尽明）即ち三明と、六つの神通力すなわち三明に天耳通（＝耳では聞こえない音を聞く）・他心通（＝他人の心を自在に見通す）・神足通（＝自在に境界を出現させて飛行する力）の三通を合わせた六通という六つの神通力を身につけた上に、八つの解脱の道と八種の精神統一の方法を用いて貪着の欲望を除くという解脱の道筋手順を身に具えるようになる。これを中品上生の者と名づけるのである。

《私訳》

先号の続きで、戒律を守り、精神を統一して心を清浄にする修行者が目指す境地がここでも極楽に往生してから得られると、説いています。ということは、釈尊の在世でも今でも、この世において修行に励む人達、聖者と呼ばれる人達の、悟りとか解脱は有り得ないということを言っておられるのではないかと想います。

《妙星斎》